

西日本の縄文研究を飛躍させた発掘調査

志津見ダム・尾原ダム建設地内の縄文遺跡群

(飯南町・雲南市・奥出雲町、1989～2008年調査) 柳浦俊一

平成元年～20年の間、埋蔵文化財調査センターでは志津見ダム(飯南町)・尾原ダム(雲南市・奥出雲町)建設に関連して30箇所の縄文時代の遺跡を発掘しました。この時に発掘された縄文時代の資料は質量ともに非常に良好なもので、これを機に、島根県での縄文時代研究は大きく進展しました。

この発掘調査以後、まず縄文土器の編年が整備されてきました。土器編年とは、それぞれの土器の特徴を把握し、土器全体の新旧関係を明らかにする研究です。編年は、考古学の研究を行う上で欠かせない基礎となります。

縄文土器は、一般的に「草創期」「早期」「前期」「中期」「後期」「晩期」の6時期に大別されます。さらに各時期は数時期に細分されますが、島根県では平成になるまでは早期(「草創期」は山陰地方では未発見)から晩期まで5時期17小時期の編年が提示されてきました。当時、近畿地方では5時期43小時期の編年でしたので、島根県では大きく後れをとっていましたが、現在では近畿地方と同等の小時期が設定されるほど研究が進みま



各遺跡出土の縄文土器

また編年の精度が上がるにつれ、研究は社会の動態や集落構造に展開し、最新の研究では、島根県・鳥取県の縄文遺跡数のピークは早期中葉(約9千5百年前)・前期前葉(約7千年前)・後期初頭(約4千5百年前)・晩期後葉(約2千5百年前)にあることが明らかとなり

ました。縄文時代は約1万3千年間存続しましたが、その間右肩上がりに発展したのではなく、栄枯盛衰があったことを物語っています。

1980年代、小林達雄氏（國學院大学名誉教授）は、住居が円形に並ぶ「環状集落」を「縄文モデル村」として提唱されました。しかし、志津見・尾原地域の広範囲を発掘しても住居跡は1遺跡で1棟発見できればいい方で、とても円形に並ぶほどの数は検出されません。現在に至っても「環状集落」は西日本では発見されず、「縄文モデル村」は東日本でのモデルだったのです。

私は、志津見・尾原ダム関連の調査成果から、西日本の縄文時代集落は広い範囲に小集落が10か所程度点在する状態（現在で言う「散村」）だったと考えています。また、これから導き出された島根県の縄文時代後期の人口は700～1000人程度と見込んでいます。なお、山田康弘氏（東京都立大学教授）は「東日本の縄文集落の密集度は世界的に見て異常。集落規模が小さい西日本の状態が世界の先史時代集落の規模に近い」と述べており、私が描く西日本の「散在型」縄文時代集落像も、あながち的外れではないように思います。

このように、志津見・尾原ダム関連の発掘調査は島根県の縄文時代研究を飛躍させ、さらに西日本の縄文時代研究に大きく寄与することになったといっても過言ではありません。



家の後Ⅱ遺跡（雲南市）の竪穴住居

（島根県埋蔵文化財調査センター調査員）